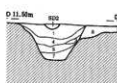
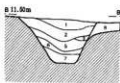
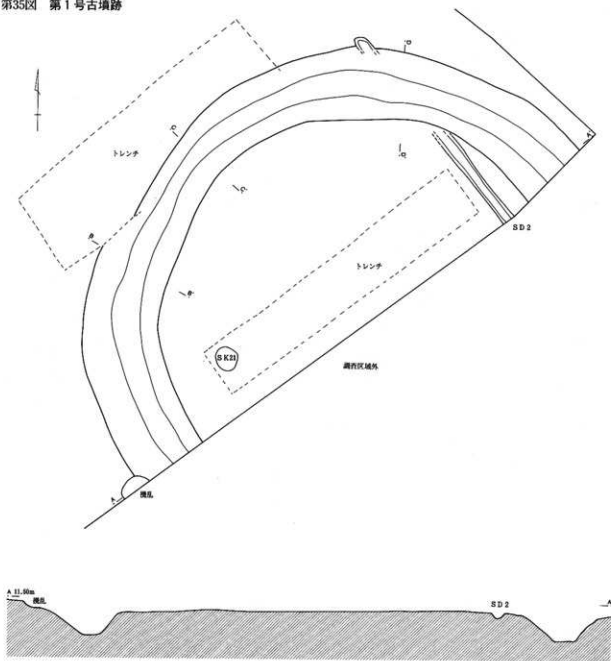


第35図 第1号古墳跡



- 1 黒色土 灰白色の粒子、ブロック少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子微量含む。
- 3 黄褐色土 白色の粘質土含む。FAか。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 5 黄褐色土 黒色土ベースの中で、ローム粒子多量含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子少量、粘土ブロック微量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量含む。



2. 古墳時代の調査

(1) 古墳跡 (第35図)

第1号古墳跡は調査区の北東部、C-2グリッド付近に位置している。北東の一部が後世の溝跡SD2と重複する他は所々に擾乱が入る。既にこの古墳跡の墳丘はなく、周溝も約1/2だけの検出であったが、周溝の形態などから円墳とみられる。周溝部分を含まない直径は約11mである。周溝の断面形態は箱菜研に近い形態で、底面はほぼ平坦であったが、北西側はやや深くなっていた。幅は1.6~1.9mと比較的規格性が保たれているが、深さは0.7~1.2mと部分的に凹凸もみられた。

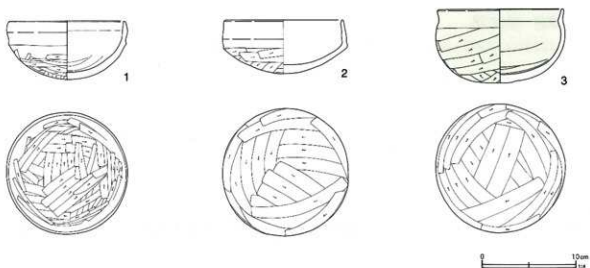
覆土は黒褐色土をベースにし、下層ほどローム粒子やロームブロックの混入の割合が高くなっている。また、覆土の中層には白色の粘質土が混入する部分が2ヶ所で検出された。FA (榛名山火山灰・6世紀初頭降下) の可能性も考えられるが、検出部分が墳丘の裾部分に限られるため、疑問も残る。神ノ木遺跡の北西

約3kmにある新屋敷遺跡では検出された75基の古墳跡の大部分からFAが確認されたが、いずれも周溝の中央部の低い部分に溜まるようになっており、神ノ木遺跡で検出されたものとは状況が異なっている。なお、ブリッジや周溝内の土壌などは検出されなかった。

(2) 遺物 (第36図)

第1号古墳跡から遺物は縄文土器の細片を除いては出土しなかった。第36図に掲載した遺物は、試掘調査において古墳跡の墳丘裾部分と思われる箇所から完形に近い状態で出土したものである。実際にこの古墳跡に伴うかどうかは不明瞭である。遺物は土師器坏が2点、同埴が1点で、いずれも古墳時代後期初頭頃の年代が与えられる。坏は1が半球形、2は内傾するタイプである。3の埴は口縁部が短く、直線的に開くタイプで、全面に赤彩される。

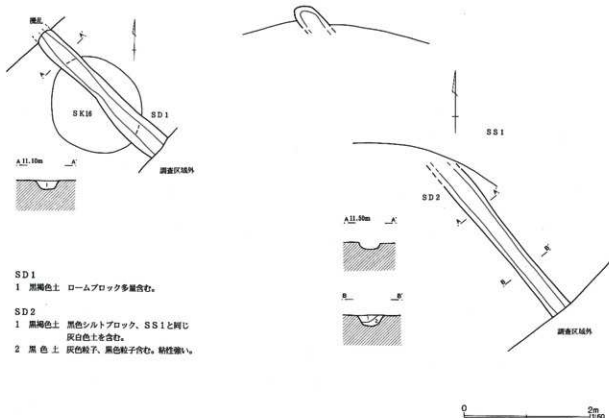
第36図 第1号古墳跡出土遺物



第2表 第1号古墳跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	12.1	6.2		A B C F	普通	橙褐色	95		
2	土師器坏	12.4	5.6		A B C D F	普通	橙褐色	95		
3	土師器埴	13.2	7.8		A B C D F	普通	赤褐色	95		全面赤彩

第37図 第1号・第2号溝跡



3. その他

(1) 溝跡 (第37図)

溝跡は調査区の北東部と南東部であわせて2条検出された。

SD1はB-3グリッドで検出された。南東側は調査区外、北西側は攪乱によって確認することはできず、僅かに長さ3m程が検出されたにすぎなかった。幅は35~45cm、深さは約15cmである。覆土は黒褐色土で、ロームブロックが多量混入するものである。遺物は出土していないため、溝跡の年代は不明であるが、縄文時代の土壌とみられるSK16の覆土を掘り込んでつくられている。

SD2はC-2、D-2グリッドで検出された。S

S1と重複しているが、約6.5mにわたって検出された。SS1の断面観察から周溝を掘り込んで構築されていた。幅は30~45cm、深さは15~20cmとSD1と同規模であった。覆土は黒褐色土でSD1に類似し、部分的にSS1の覆土が混入していた。遺物はSD1と同様、出土していない。

SD1と2は検出された長さこそ異なるが、覆土の類似性、幅や深さなどの規模、方向が南東~北西方向に向いているなど規格性をもっている。2条の溝間は丁度25mの間隔をもった平行関係にあり、計画的につくられた可能性も考えられる。

V まとめ

1. 縄文時代の土器群について

神ノ木遺跡の調査区から縄文時代の遺構としては、土壌2基が検出されている。また、遺構は伴わないものの、調査区の北半部を占める古墳周溝の覆土やその周辺からは、多量の縄文土器片が出土している。おそらく古墳築造時にあたり、多数の縄文時代の遺構が壊された結果と考えられる。

縄文時代の土壌は、古墳が存在していない調査区の南半部に密集して検出されている。

出土した土器は、第3号土壌と第21号土壌からは、第Ⅲ群土器の称名寺式系土器が検出された。またその他の遺構内からは、第Ⅳ群土器とした堀之内Ⅰ式系土器が主体として出土している。上記2基以外の土壌は、すべて堀之内Ⅰ式の範囲内の時期と考えられる。

また調査区内の、遺構に伴っていない縄文土器片の時期は、縄文時代早期から後期に及ぶが、早期から中期の土器の出土量は少なく、後期初頭から前葉の土器群がそのほとんどを占めている。

そこで神ノ木遺跡出土の主体となる第Ⅳ群土器～第Ⅴ群土器を中心に後期初頭から前葉の土器群について、土壌出土の土器を中心に概要をまとめてみた。

後期初頭の土器群（第Ⅱ群、Ⅲ群土器）

後期初頭の土器群のうち、第Ⅲ群土器とした称名寺式系土器は、グリッド出土も含め、いずれも破片資料のみで、全体が復元できるものは出土していない。

遺構からは、堀之内Ⅰ式を主体とする土壌のほとんどから少数であるが、出土している。土壌から出土した第Ⅲ群土器は、小破片のため文様は明瞭ではないが、称名寺Ⅰ式の後半からⅡ式にかけて、鈴木徳雄氏の7段階細分（鈴木1990）では5～7段階に相当すると考えられる。称名寺式土器が主体的に検出されている第3号土壌と第21号土壌も、いずれも小破片であるが、同様の段階と考えられる。

グリッド出土土器も土壌出土と同様に、称名寺Ⅰ式

の後半からⅡ式が主体として出土しているが、グリッドからは開沢類型の土器片も出土しており（第21図71～78）、今村啓爾氏の称名寺Ⅰb～Ⅰc式段階のものも一部含まれると考えられる。しかし、称名寺式の最古段階の土器は出土していない。

また加曾利Ⅰ式系の第Ⅱ群土器の半数近くは、後期初頭段階の土器群と考えられる。第20図45～49の胴部の隆帯間が幅広く施文されるものは、称名寺Ⅰ式段階のものも含まれると考えられる。

後期前葉の土器（第Ⅳ群、Ⅴ群土器）

堀之内Ⅰ式期（第Ⅳ群土器）

本遺跡の主体となる土器群である。遺跡出土の土壌のほとんどが、この時期に含まれる。

土壌出土のうち、復元可能な土器は地文のみの粗製土器以外は、地文に縄文が施されず沈線によって文様が施文されるもので、いわゆる西関東系の色合いの濃いものが多い。しかしながらグリッド出土土器において、縄文系の東関東系土器が占める割合は高く、住居跡などの遺構が検出されない状況では、土器群の構成比率については一概に言うことができない。

堀之内Ⅰ式は、阿部芳郎氏や石井寛氏によって4細分や5細分の分類がなされている（阿部1987、石井1993）。しかしながら本遺跡から出土した土器は、破片資料が多くそれらの細分が困難なことから、大きく古・新などの表現をすることとする。

全体の文様がわかる土器のうち、第2号土壌出土の第8図1は、いわゆる沈線系とされる西関東系の土器であるが、胴部文様には称名寺式の文様構成はみられず懸垂文化しており、Ⅰ式でも新しい方に含まれると考えられる。第6号土壌出土の第11図1も、第2号土壌と同様であるが、蛇行懸垂文が3本単位となっている。また第4号土壌出土の第9図1も無地文の懸垂文系土器で、ほぼ同様の時期と考えられる。山形巴手間

を結ぶ弧状の沈線文は、称名寺系の要素とも考えられる。

他の土壌出土の堀之内式系土器も、堀之内初頭段階の土器はほとんど見られない。

グリッドからは、称名寺系土器の文様構成が残る下北原系土器（第24図217～241）などが出土しているが、全体的には古い段階のものは少ないといえる。

また堀之内式期は、さまざまな類型で構成されることが知られ、石井寛氏は報告書で堀之内Ⅰ式土器をA群～F群に分類している（石井1993）。

グリッド出土土器で分類したように、本遺跡出土の堀之内Ⅰ式も様々な類型の土器群で構成されている。また異系統の土器としては、細取系と三十稲場系土器が挙げられる。特に三十稲場系土器は、第15号、第16号土壌から出土している。

これらの堀之内Ⅰ式の成立に関しては、近年において新屋雅明氏、金子直行氏、鈴木徳雄氏によって検討がなされてきている（新屋1996、金子1997、鈴木1999）。新屋氏は称名寺Ⅶ段階をもって堀之内Ⅰ式とし、金子氏は、深谷明戸東遺跡第28号住居跡などを例に挙げ、従来の称名寺Ⅱ式の新しい段階、鈴木氏のⅦ段階を持って堀之内Ⅰ式の成立期とした。それらを受け鈴木氏は、関沢類型から茂沢類型、小仙塚類型へと続く形成過程から茂沢類型を伴う明戸東第28号住居を、称名寺最終未段階とした。

その後金子氏は、鈴木氏の見解を踏まえ、堀之内Ⅰ式の成立段階を、茂沢類型と関東東部及び東北南部の該当時群との関係が明らかになった段階で、再検討したい（金子2000）としている。

神ノ木遺跡出土の堀之内Ⅰ式土器については、すでに概観してきたように、確立期以降の土器が出土しており、成立期に関わる土器群は出土していない。しかしながら称名寺Ⅱ式土器の破片が、ほとんどの堀之内Ⅰ式期の土壌から一緒に出土している。それ以前の時期の土器片は、堀之内Ⅰ式期の土壌からはまったく出土していないと言ってよい。このことは称名寺Ⅱ式と堀之内Ⅰ式がごく短期間のなかで、存在していたこと

を示唆していると考えられる。

堀之内Ⅰ式の成立に関しては、金子氏などが指摘するように、東北南部や北陸との関連、また称名寺式期を通して存在する加曾目E系から続く要素との関連、地域性など総合的な理解の上で検討する問題であり、今後の課題となるものである。

堀之内Ⅱ式期（第Ⅴ群土器）

遺構に伴う土器は検出されていないが、第Ⅳ群土器について、グリッドからは多量の土器が出土しているため、古墳の築造によって該期の遺構が破壊されている可能性がある。

第Ⅴ群土器は、堀之内Ⅰ式末葉からⅡ式にかけての土器群で、そのうち堀之内Ⅰ式末葉の土器群は第Ⅳ群土器より明らかに新しい様相をもつものである。

第Ⅳ群土器の類別に対応する土器は下北原系、懸垂文系、縄文系の小仙塚類型などだが、下北原系は懸垂文系、縄文系に施文される沈線文がいずれも細線化し、ごく浅く施文される傾向にある。また懸垂文や沈線文は多条化している。

前段階で見られた細取系の土器は、この段階では明確なものも検出されていない。細取系の新しい土器群が南三十稲場系の土器と類似していることから、南三十稲場系の要素を持つ第28図409が相当するとも考えられる。

第Ⅴ群土器の6類としたバケツ形の土器群は、一般的に堀之内Ⅱ式とされるものである。いずれも薄手の土器で丁寧につくられているものである。

また第29図432は堀之内Ⅱ式土器で、唯一復元実測が可能であった土器である。口縁部が外反し胴部中ほどで膨らみ底部にいたる器形である。器形と同様に文様のモチーフもほかに類似するものがなく、北陸や東北の系譜と考えられる。

堀之内Ⅱ式もⅠ式と同様に3～4細分がなされているが、資料も少なくここでは細分は行わない。

バケツ形の土器の中では後半の様相を持つものも多く、同一個体と考えられる第30図484～493は、地文を

充墳する沈線の区画が狭くなり、器面上で文様の空白部分が多いことからⅡ式後半の土器と考えられるものである。

堀之内Ⅱ式もⅠ式同様、その成立に関してはⅠ式からの変化の画期はもちろん、北陸や東北部の土器群との整合性などが絡んでくると考えられる。

神ノ木遺跡から出土した、後期初頭から前葉の土器群について概要を述べたが、この称名寺式、堀之

内Ⅰ式、堀之内Ⅱ式の変遷については、あとに続く加曾利B式との関連も含み、まだまだ流動的な部分が多いと考えられる。その変遷の過程は、文様の変化を辿るという閉鎖された空間で行うものではなく、文様の変化が縦系列とすれば、地域間の整合性という横系列も常に念頭におかねばならない。

今回は表層的なことに終始したが、以上のことは今後の課題としていきたい。

2. 神ノ木遺跡周辺の古墳について

神ノ木遺跡から検出された古墳時代の遺構は、古墳跡が1基である。この古墳跡からは直接古墳時代の遺物は出土しなかったが、試掘調査においてこの古墳跡の墳丘裾と思われる付近から土師器が3点出土している。実際にこの土師器が古墳に伴うか否かは問題を残すが、3点の土師器はほぼ同時期の土器群として捉えられ、一括して使用されたことは十分に考えられる。3点の土師器の内訳は坏が2点、埴が1点である。坏はタイプが異なり、須恵器模倣の底部が半球形のものと同縁部が内傾するものである。埴は全面に赤彩が施されている。これらの土器の年代は、Ⅱ項でも述べたように埴玉古墳群の中で稲荷山古墳が築造される後期初め頃にあたる。周知のように稲荷山古墳の出土遺物には辛亥銘鉄剣をはじめ多くの土器や埴輪、馬具などあり、古墳の築造にあたって微妙な年代観の差を生む要因にもなっている。ここでは、この頃の周辺の古墳群について簡単に触れておきたい。

県東部（北東部）では現在のところ、古墳時代後期以前に遡る古墳や古墳群は確認されていない。行田市稲荷山古墳が築造される頃になると、県東部の各地、とりわけ埴玉古墳群周辺では元荒川流域を中心に急速に古墳群の築造が始められている。菖蒲町では、夫婦塚古墳、東浦古墳が比較的古い時期に築造され、次第に天王山塚古墳のある栢山地域へ中核部が移っていったものと考えられている。東浦古墳では白色を帯びた円筒埴輪や鳥形埴輪、人物埴輪などが出土している。白色の埴輪については後期初頭の鴻巣市新屋敷遺跡

（生田塚古墳群—新屋敷支群）や稲荷山古墳の中にも見られ、稲荷山古墳築造時の特色の一つとして捉えられている。稲荷山古墳には新屋敷遺跡南東の生田塚埴輪窯（5世紀末～6世紀後半まで操業）の埴輪が一部使用されていることが明らかになっているが、この白色の埴輪も付近で焼かれた可能性が高いとみられており、この周辺には埴玉古墳群との関わりが強い階層が存在したのと考えられている。また、この埴輪は単独で出土する例は少なく、新屋敷遺跡では他の赤褐色をした埴輪とともに構成され、5世紀末～6世紀初め頃の土器が伴っている場合が多い。しかし、白色の埴輪については、胎土などの違いによって稲荷山古墳や新屋敷遺跡などの系統とそうでない系統があるようであり、前者は5世紀末頃に生産が始まり、後者は、6世紀末頃の古墳にまで供給されている。前者は操業停止の時期、後者は開始の時期が明らかではなく、細部については今後に残された課題といえる。なお、東浦古墳の場合は、白色の埴輪の他に生田塚埴輪窯跡の製品も混ざっているが、後者の可能性が考えられている。

菖蒲町の北側に位置する騎西町では、古墳の存在はあまり知られていないが、5世紀後半からの古墳群の存在を窺わせるような土器群や埴輪が出土している。これらの遺物は埴玉古墳群も含めてこの付近の古墳時代の遺物では最も古い一群であり、埴玉古墳群成立の一翼を担っていたのと考えられる。また、南西に位置する鴻巣市生田塚古墳群は100基以上の規模をもち、5世紀末～7世紀中頃まで存続する中核的な古墳群で

ある。この中で新屋敷支群と呼ぶ北側に位置する古墳群（新屋敷遺跡）は、帆立貝式古墳を中心に、5世紀末～6世紀初めの時期を主体とするものである。出土遺物には稲荷山古墳に類似した須恵器や埴輪も含まれており、何らかの関連性があったものと推測される。埼玉古墳群のある行田市では若王子古墳群、酒巻古墳群など数多くの古墳が存在するが、多くは6世紀中頃以降に築造されたもので、前半まで遡るものは殆ど確認されていない。

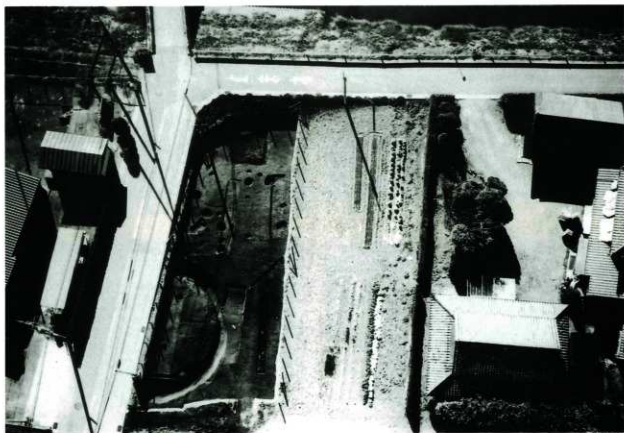
このように埼玉古墳群の周辺では埼玉古墳群をとりまくように後期初頭の古墳や古墳群が形成され、その後百年あまり続く埼玉古墳群の一翼を担っていったものと推測される。また、騎西町周辺、新屋敷支群を除

くと大半は6世紀後半以降の古墳であることも事実である。このことは埼玉古墳群を担っていた地域がある程度限定できるのと同時にそれらを支える集団等が次第に外側へと広がっていったことを示すものであろう。また、新屋敷支群などのように埴輪窯が隣接する場合を除いては初期の古墳群が継続して同じ地で築造されることは少ない。菖蒲町では東浦古墳や夫婦塚古墳をはじめ柏山周辺に集中する傾向があるが、今回の神ノ木遺跡のように柏山古墳群より古く、東側に位置する古墳の発見は、騎西町周辺の古墳時代後期初頭の様相とともに今後埼玉古墳群の成立期の問題を考えていく上で貴重な成果といえよう。

引用・参考文献

- 阿部芳郎 1987 「縄文時代後期前葉型式群の構成と動態―塚之内Ⅰ式と東北地方の型式群の関係について―」『駿台史学』第71号
- 阿部芳郎 1988 「塚之内Ⅰ式土器の構成と変遷」信濃第40巻第4号
- 新屋敷明 1996 「今羽丸山遺跡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第173集
- 石井 寛 1993 「牛ヶ谷遺跡・草葺台南遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅤⅣ
- 石井 寛 1995 「川和向原遺跡・原出口遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅤⅥ
- 磯崎 一 1989 「新田裏・明戸東・原遺跡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第85集
- 金子直行 2000 「塚東/城西Ⅱ」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第257集
- 金子直行 1997 「戸崎前遺跡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第187集
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式鬘沢型土器の後裔―塚之内Ⅰ式期における小仙塚型土器の形成―」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 古田 稔 1995 「修磨山遺跡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第158集
- 渡辺清志 2000 「浜平岩陰/入波沢西/入波沢東」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第243集
- 大谷 徹也 1998 「新屋敷遺跡D区」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第194集

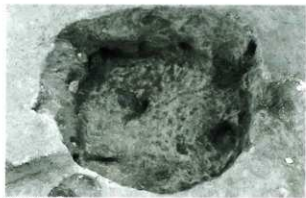
写真図版



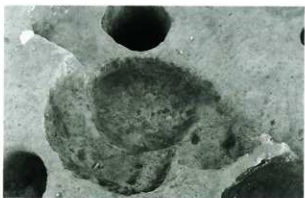
遺跡全景



第1号古墳跡



第1号土壤



第9号·第10号·第18号土壤



第4号土壤



第14号土壤



第6号土壤



第21号土壤



第8号土壤



第1号清跡



第2号土壙出土遺物 第8図-1



第17号土壙出土遺物 第15図-1



第4号土壙出土遺物 第9図-1



第20号土壙出土遺物 第18図-1



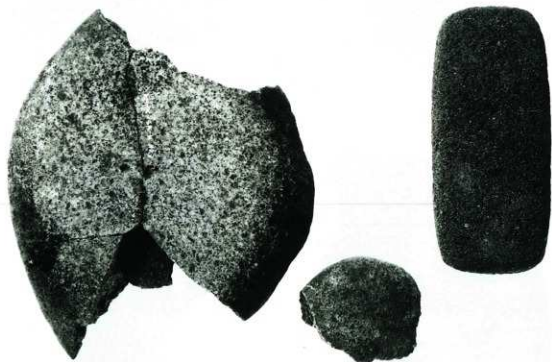
第6号土壙出土遺物 第11図-1



グリッド出土遺物 第29図-432



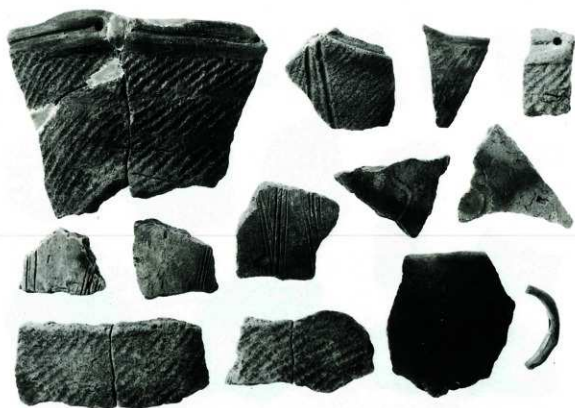
第4号土壇出土遺物(1) 第9図



第4号土壇出土遺物(2) 第10図



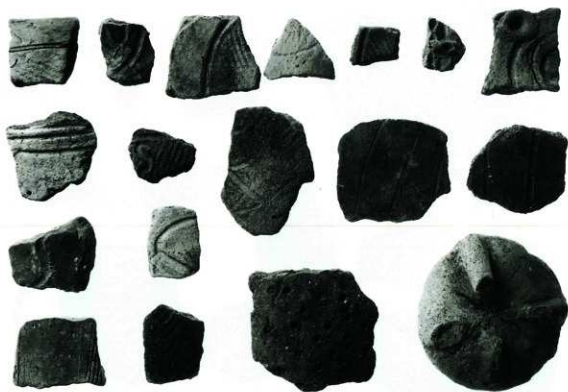
第6号土壙出土遺物 第11図



第8号土壙出土遺物 第12図・第13図



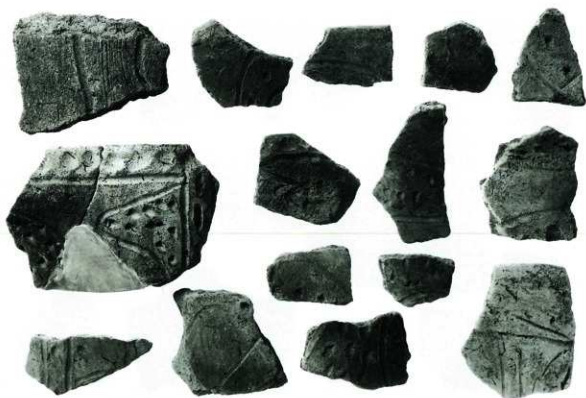
第10号土壇出土遺物 第13図



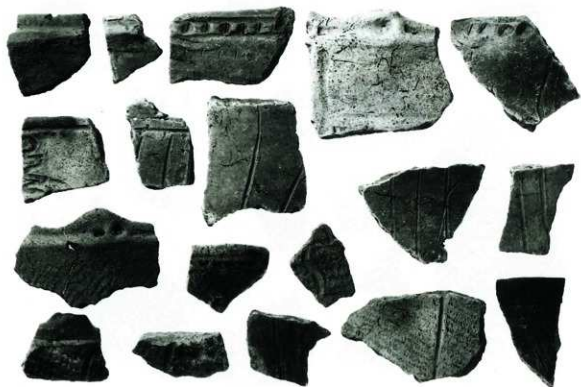
第15号土壇出土遺物 第14図



第16号土壙出土遺物 第15図



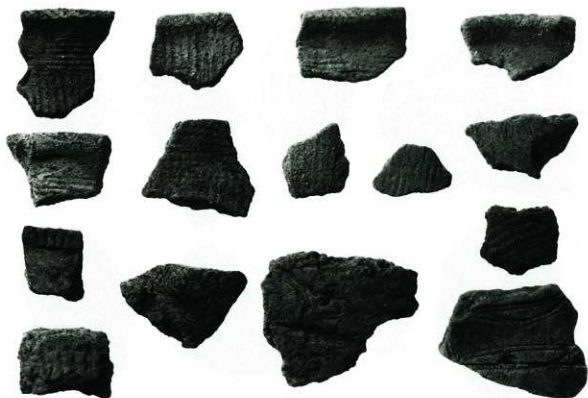
第17号土壙出土遺物(1) 第15図



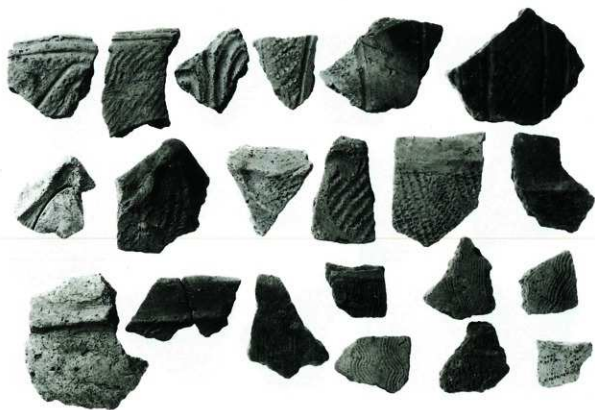
第17号土坑出土遗物(2) 第16图



第20号土坑出土遗物 第18图



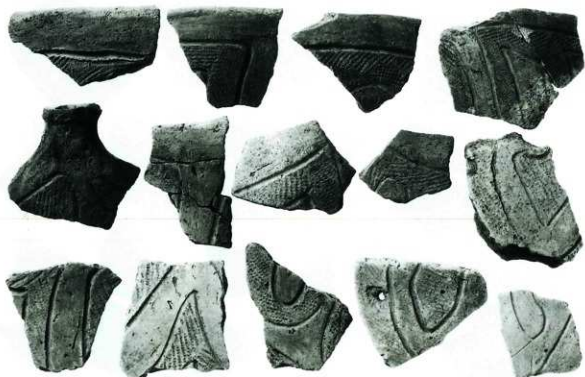
グリッド出土物 第19図



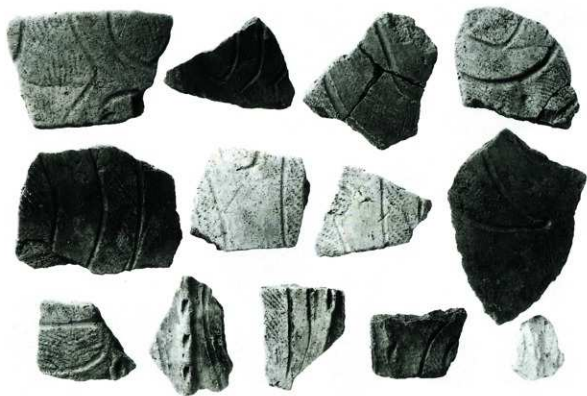
グリッド出土物 第20図



グリッド出土遺物 第21図



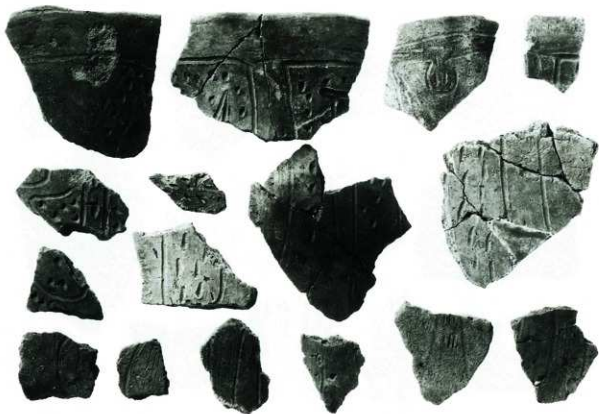
グリッド出土遺物 第21図



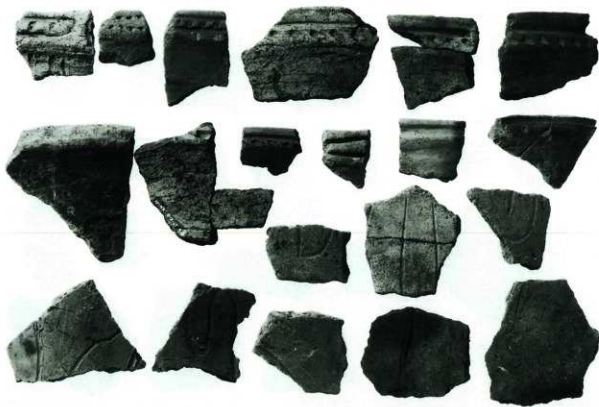
グリッド出土遺物 第22図



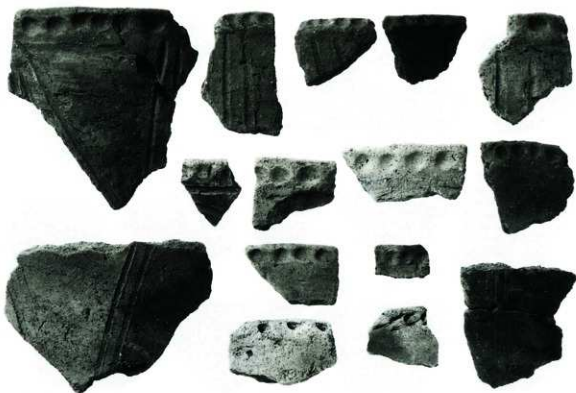
グリッド出土遺物 第22図



グリッド出土遺物 第23図



グリッド出土遺物 第24図



グリッド出土遺物 第24図



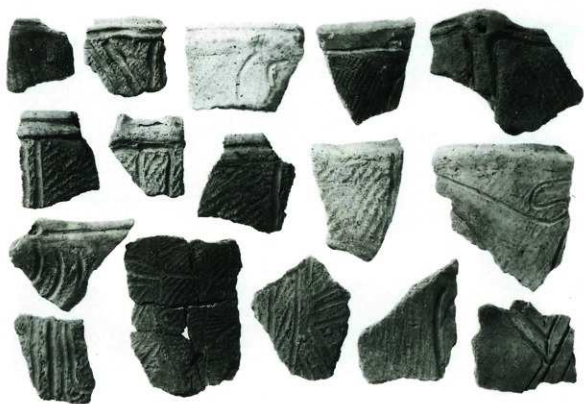
グリッド出土遺物 第25図



グリッド出土遺物 第25図



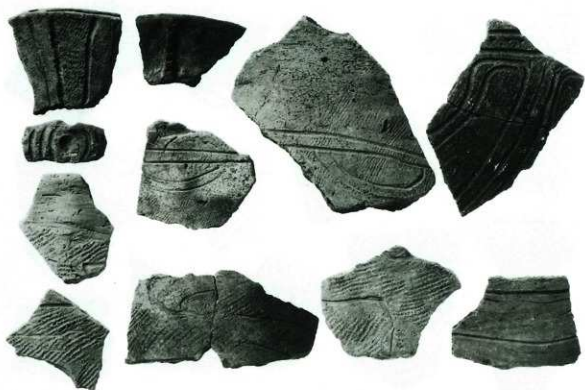
グリッド出土遺物 第26図



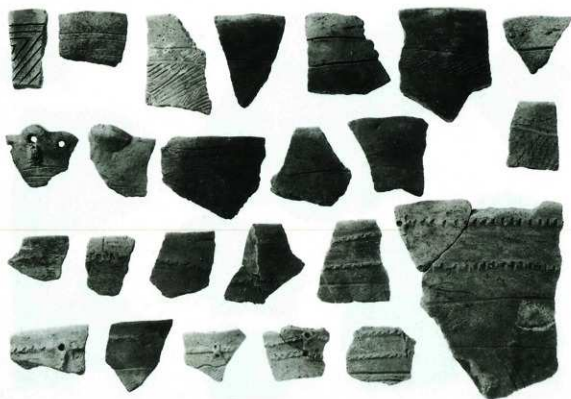
グリッド出土遺物 第26図・第27図



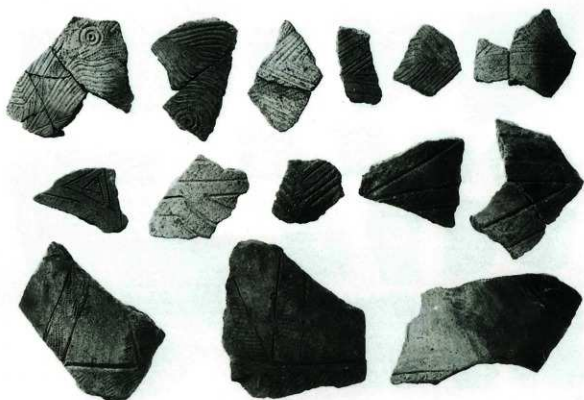
グリッド出土遺物 第28図



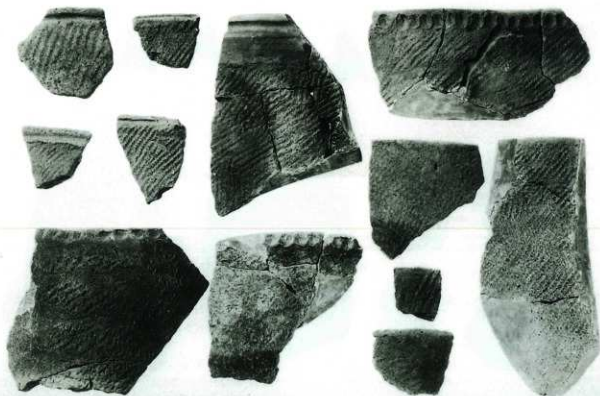
グリッド出土遺物 第29図



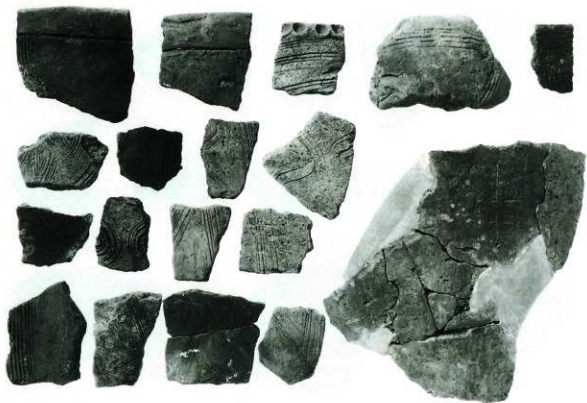
グリッド出土遺物 第29図



グリッド出土遺物 第30図



グリッド出土遺物 第31図



グリッド出土遺物 第32図



グリッド出土遺物 第34図

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみのきいせき							
書名	神ノ木遺跡							
副書名	県宮水道幸手幹線敷設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第262集							
著者氏名	昼間孝志・金子直行・上野真由美							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2000(平成12)年9月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かみのきいせき 神ノ木遺跡	さいたまけんみなみまきいせき 埼玉県南埼玉郡 しょうほまちおおあざしばやま 高蒲町大字柴山 あだごう ほんち 枝郷1531番地1 ほか 他	11446	007	36°2′31″	139°36′21″	20000106 ↓ 20000131	372	水道管 敷設工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
神ノ木遺跡	古墳跡	縄文時代 古墳時代	土壇 古墳跡		土器 石器 土師器			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第262集

南埼玉郡葛蓆町

神ノ木遺跡

県営水道寺手幹線敷設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成12年9月21日 印刷

平成12年9月30日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／巧和工藝印刷株式会社